を含めてはどうか。

（３）「人にやさしいまちづくり推進計画」というテーマであれば、アンケートの対象として、一般成人だけではなく、中学生・高校生という若い層を含めた方がよかったのではないか。

（４）本計画は地域福祉計画に触れているが、第２期西東京市地域福祉計画は本計画に触れていない。触れておくべきではなかったか。

２　助言者のコメントに対する筆者の回答など参考事項

（１）については、本計画は、高齢者、障害者あるいは外国人居住者など特定の層を対象としたものではなく、広く西東京市民（西東京市に在住・在勤・在学する者など）を対象とした計画であり、外国人居住者への対応については触れていない旨筆者より回答した。

（２）～（４）については、研究大会の要旨とともに、後日、事務局に報告した。委員の一員として、計画改訂の際の参考としたい。

地域福祉活動における社協の役割について
－長野市社協のボランティア戦略から－

清泉女学院短期大学
安　藤　健　一

１．研究目的

日本における社会福祉協議会の歴史は、第2次世界大戦の終結に際し、日本において占領政策を実施した連合国軍の機関である連合国最高司令官総司令部（GHQ）が1949年に「社会福祉に関する協議会の設置」を指示したことに始まるが、長野県では、1951年8月18日に長野県社会福祉協議会が設立され、同年9月25日に長野市社会福祉協議会（以下、長野市社協）が設立された。

長野市は、長野市の県庁所在地であり、1999年に中核市として指定されている。周辺の町村との市町村合併が2005年および2010年に行われた結果、人口38万７千人余の都市となった。一方、社協に関しては、市町村合併の結果、合併された町村の町村社協は長野市社協と合併されることになり、現在の市社協の職員数は、非正規雇用を含め１千人を超える状態になっている。

本研究では、長野市社協が1987年から設置しているボランティアセンターの事業の中で、とくにボランティア事業「サマーチャレンジ・ボランティア」（以下、適宜“サマチャレ”と略す）に焦点をおき、その事業をＰＤＣＡサイクルという視点で検証し、長野市社協がサマーチャレンジ・ボランティアを介して行っているボランティア戦略について考察を行うものである。

同センターの活動は、スタッフのみならず市民の意見を活動に反映させており、そのためにボランティアセンター運営委員を市民から募っている。筆者は、平成21年度から運営委員として加わり、運営活動に参加している。

２．研究の視点および方法

本研究は以下の２つの視点にもとづき、それぞれの方法を併用して行うものとする。

（１）アンケート調査の分析

サマーチャレンジ・ボランティアの事前研修会への参加者から集められたアンケート用紙とその集計結果をもとに分析する。

■調査の概要

対象者：事前研修会出席者（参加者）317名

方　法：事前研修会に出席者全員に配布し、当日（会終了後）に回収を行った。

実施日：2009年7月20日（月）

回収率：65.6%（提出者数　208名）

内　容：基本属性に関する項目（性別、所属）、手続きに関する項目、活動先の希望、研修会に関する項目（シンポジウム、受け入れ先との打合せ、有益と感じたこと）、事後研修にする項目.

以上　上記に関する８項目(記名なし)

（２）ＰＤＣＡサイクル

Ｐ（plan）は計画、Ｄ（do）は実施、Ｃ（check）は評価、Ａ（action）は改善をそれぞれ意味している。この一連のプロセスを経て、更に良きサイクルを生み出し、正のスパイラルを生じさせていくという考え方である。このＰＤＣＡサイクルにもとづき、

上記のアンケート結果とサマーチャレンジ・ボランティアとの関連を分析する。

３．研究結果

事前研修会における質問紙形式の調査は、毎年行われているが、年によって参加者の広がりに若干の違いがみられる。2009年度の参加者を所属別にみると、中学生、高校生、専門学校生、社会人であり、短大生や大学生の参加はなかった。有効回答数は206であり、中学生が82（男女比14：68)、高校生が109（7:102)、専門学校生が11（8:3)、社会人が1（0:1)、不明が3（2:1）であった。このように回収されたアンケートは女性のものが多いのであるが、参加者全体の性別による傾向としても女性の割合が多い状況である。

参加者によるボランティア活動をしたい場所の希望をまとめると、男性は高齢者施設（13)、児童施設（6）の順で多く、女性は児童施設（76)、高齢者施設（25)、地域（13）という順であった。両者ともに「特記なし」つまり特別に希望する場所はないという回答をした参加者が、有効回答数206のうち38(18.4%)を占めているのが特徴である。

質問紙の項目７「今回の事前研修会で何が一番、ためになりましたか？」への回答は自由記述のため、記述内容からコード化し７つに分類して整理し、所属先とクロス集計し表１としてまとめた。「心構え」とは、「事前研修会に参加してボランティアに行く心構えができた」という内容のまとまりである。以下、同様に「情報取得」は「事前研修会に参加して、ボランティアに関すること、ボランティア先で行う活動内容、施設の情報がわかった」というもの、「目的確認」は「ボランティアに行く目的や参加したいと思う気持ちの確認あるいは再確認ができた」というもの、「打合せ」はボランティア先の職員が同席して行う打合会を研修会内で行っているため「施設の職員さんと日程や内容についての具体的な確認や打合せができた」というもの、「感想」は一番タメになったものを挙げずに研修会全体に対する感想を綴っているもの、「記述なし」は無回答のものである。

「情報の取得」が最も多く、次いで「記述なし」、「目的確認」、「心構え」の順になっている。

表1　研修会でタメになったこと

	中学生	高校生	専門学校生	社会人	合計
心構え	10	9	2	0	21
情報取得	43	46	2	0	91
目的確認	6	15	2	0	23
打合せ	10	10	1	0	21
感想	1	0	0	0	1
記述なし	11	29	4	1	45

サマーチャレンジ・ボランティア実施のプロセスを長野市社協ボランティアセンターにおけるＰＤＣＡサイクルとしてまとめると次のようにな

る。

Ｐ…昨年までの実績やアンケートの結果から、次年度の予想等をもとに計画を作成する。

Ｄ…計画にそって、サマチャレを実施する。

Ｃ…サマチャレが計画にそって実施されているか、また実施したかを確認する。

Ａ…実施した内容が計画（目的）にそっていない部分を調べて改善策を講じる。

ボランティアセンターの運営委員とボランティアセンターのスタッフは、それぞれ幾つかのワーキング・グループ（以下、ＷＧ）に分かれ、具体的な運営活動を行うのであるが、サマチャレを扱うのは活動開発研究会というＷＧである。このＷＧによってサマチャレについて議論され、結論が導かれている。

Ｐ…計画段階で問題になったのが、09年度も含め、ここ数年の参加者の減少傾向である。ＷＧでは「ボランティアをする高校生などに、高いハードルを求めていたのではないか？」との議論になり、「ボランティアをしたい気持ちを重要視」したボランティア活動への導入方法を検討した。また、08年度のアンケート結果から「事前にボランティア先の様子が知りたい」という参加者の傾向があり、「事前研修会で受入施設の職員と十分なコミュニケーションが取れていない」のではないかと考察した。また「充実したボランティアをしたい」との要望もあり、これには受入施設職員がうまくコーディネートできていない可能性が示唆されており、ボランティアセンターのスタッフが施設職員と打合せをして、より良いボランティア環境を構築することも検討し、計画づくりを行った。

Ｄ…参加者の募集を実施し、300名を超える応募があった。事前研修会の実施においては、ボランティアの受入施設職員も参加する形態にし、施設職員と参加者が相談できる時間を設けた。また、研修会後には、アンケート調査を実施。サマチャレも各施設で行われ、事後研修会も実施した。

Ａ…前述の09年度のアンケート結果などから次年度に向けて改善策が考えられた。

①研修会を４カ所で実施…ボランティアセンターまで足を運ぶのは交通の便や移動の時間等の問題で難しいというアンケート結果もあった。また、住民生活に根ざす活動を目指すため、研修会の開催場所を４カ所へと増やす改善策が出された。

②参加者がボランティア先を開発可能…09年度までは参加者へのボランティア先希望調査（応募時に記入）をもとにスタッフが配属先を割り振っていたが、参加者の自主性を尊重し、自ら選び、配属先を新規に開発することも視野に入れた。

③ボラ内容理解のため委員も体験…机上の論議にならぬよう運営委員がサマチャレの一部に参加・観察ができる仕組みを設けることにした。

④サマチャレに続くボラ活動の開発…サマチャレでの体験をさらに継続できるよう年間を通したプログラムの開発など、多様なニーズに対応したチャレンジ・ボランティア・プログラムの開発について議論された。

４．考察

長野市社協におけるボランティアセンターでは、表２のようにそれぞれが役割を担う形でＰＤＣＡサイクルを形成していることが考察される。

また、長野市社協はボランティアセンターに象徴されるように、スタッフのみでなく、運営委員やボランティアの参加者が織りなす活動により、住民参加型の運営を行い、住民の自主的な参加を実現している。さらに、組織内だけで完結することなく、市民との協働によってＰＤＣＡサイクルを確立し、ボランティア国際年で掲げられた４つの目的を具現化している。図１に示すように、このような三者の協働によりボランティア活動を推進していくことが長野市社協のボランティア戦略であると考察される。

本研究は、社協がもつ機能の一部を取り上げたが、それも完成したものでなくプロセス上にあるものである。今後も継続した研究を行い、社協のもつ機能を明らかにしていくことは、地域福祉の発展にとっても重要であると考えている。

表２　ＰＤＣＡサイクルとそれぞれの役割

	Ｐ（計画）	Ｄ（実施）	Ｃ（評価）	Ａ（改善）
スタッフ	・スタッフ会議 ・昨年度の反省 ・現場視察 ・事前研修会	・現場との連絡 ・学校等へ連絡 ・活動視察	・スタッフ会議 ・アンケート分析 ・聞き取り ・運営委員会へ報告	・スタッフ会議 ・運営委員会で検討 ・反省点の明確化 ・改善点の明確化
運営委員	・運営会議 ・昨年度の反省 ・新規アイデア ・研修会プラン	・事前研修会 （講師として） ・事前研修会 （運営スタッフ）	・運営会議 ・アンケート分析 ・実施状況のチェック	・反省点の明確化 ・改善点の明確化 ・新しい仕掛け考案 ・参与方法の改革
参加者	・申し込み ・ボランティア先選定	・事前研修会に参加 ・ボランティア活動に参加	・事後研修会への参加	
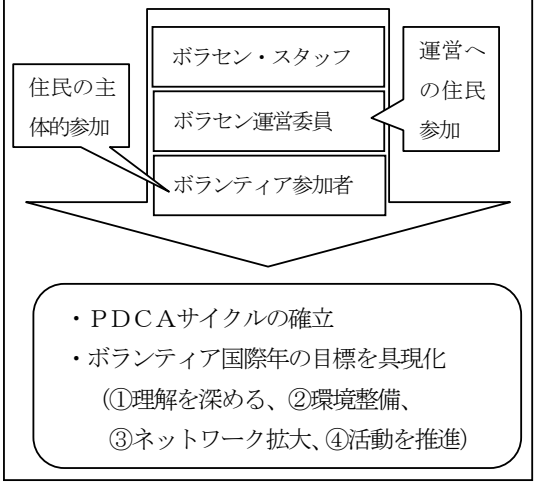
図1　長野市社協のボランティア戦略